

MD研究者育成プログラム参加学生に対する支援

番号	氏名	参加学会名	出張場所	出張期間
1	S. S	グローバルヘルス合同大会2020大阪	梅田スカイビル	2020/11/1 ～ 11/3
2	S. S	第31回日本疫学会学術集会	オンライン配信によるWeb開催	2021/1/27 ～ 1/29

グローバルヘルス合同大会 2020 大阪

Joint Congress on Global Health 2020 in Osaka

大会長 第61回 日本熱帯医学会大会

金子 明 (大阪市立大学)

第35回 日本国際保健医療学会学術大会

中村 安秀 (甲南女子大学・日本WHO協会)

第24回 日本渡航医学会学術集会

南谷 かおり (りんくう総合医療センター)

第5回 国際臨床医学会学術集会

中田 研 (大阪大学)

交じる、つながる、
支えあう



チャンプー！

Campur! Integration, Solidarity and Collaboration

会期 2020.11/1日 - 3日

Date : November 1 (Sun.) - 3 (Tue.), 2020

グローバルヘルス合同大会2020は
オンライン開催といたします

Joint Congress on Global Health 2020
to be Held as an Online Meeting

■ 運営事務局 株式会社JTB 西日本MICE事業部 (営業時間: 9:30~17:30 土・日・祝祭日は休業)
〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8 MAP本町ビル9階
Tel: 06-6252-5049 (9:30~17:30) Fax: 06-7657-8412 E-mail: gh2020@jtb.com

<https://www.gh2020.jp/>

MD 研究者育成プログラム岸本国際交流奨学金 活動報告書

大阪大学大学院医学系研究科 国際未来医療学講座/大阪大学医学部医学科 5 年次

S・S

この度、11月1日から3日の3日間にわたり、グローバルヘルス合同大会 2020(URL: <https://www.gh2020.jp/>)に参加させていただきましたので、ご報告申し上げます。

グローバルヘルス合同大会 2020 は、国際医療にかかわる 4 つの学会(日本国債保健医療学会、日本熱帯医学会、日本渡航医学会、国際臨床医学会)が 3 年に 1 回、合同で開催している学術集会である。グローバルヘルスに関する合同大会は、遡ること 20 年以上前になる 1999 年に日本熱帯医学会と日本国際保健医療学会が「21 世紀の熱帯医学と国際保健医療協力」のテーマの下で国立国際医療センター(当時)において開催されたことから由来している。その後、北九州、長崎、東京などで 2008 年以降は 3 年ごとに 2 学会による合同大会が開催され、2017 年には日本渡航医学会が参加し 3 学会の合同大会になった。今年 2020 年はこの 3 学会に加え国際臨床医学会が新たに加わり、はじめての 4 学会での合同大会、はじめての大阪での開催となった記念すべき学術大会である。本来であれば日本の国際医療の学術祭典として大々的に大阪大学が主催で開催される予定であったが、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響を受け、大阪大学をホストとしながらオンラインでの開催となった。

今回は、オンライン開催という形式の変更などに伴い、従来のように口頭演題ではなくポスター演題の形式にて発表を行った。これに加え、今回の合同大会の企画として 4 学会合同の学生シンポジウムの企画と座長を務めた。さらに、本学会では大阪大学がホストを務めたことから学術大会の準備委員会として在籍したため運営の後方支援も合わせて行った。

活動概要

演題発表(ポスター)

今回のポスター発表は、MD 研究者育成プログラムとして在籍している国際未来医療学講座の活動に基づき行った。今までも何度か本関連学会にて演題を発表させていただいたが、今回は初めて公益社団法人日本 WHO 協会との共同発表となった。オンライン学会という会場の制約に伴いほかの参加者との質疑応答などの議論を行うことはできなかったが、COVID-19 に基づいて変わりゆく社会において、現在の社会において必要とされる資料を提供できるよう心掛け発表を行った。

シンポジウム 4 「私たちはどこへ向かうのか～医学生 of COVID-19 への反応、順応、応答～」

グローバルヘルス合同大会 2020 大阪は、国際臨床医学会、日本渡航医学会、日本国際保健医療学会、日本熱帯医学会が合同で開催する初めての合同学術大会である。それを記念し、各学会の学生代表がシンポジウムを組むこととなった。私は今回、国際臨床医学会、日本渡航医学会、日本国際保健医療学会の学生を代表して企画責任を担い、日本熱帯医学会学生部会の代表である長崎大学医学部医学科の山崎里紗氏とともに共同座長を務めた。

企画段階では、将来医療従事者となる医学生が、今どのようなことをアカデミックな場において議論を行うべきなのかということを意識してシンポジストの人選、そして方向性を検討していった。改めて言うまでもなく、COVID-19 は世界全体に影響を及ぼし、医療環境のみならず社会環境を大きく変貌させた。その影響は医学生の生活にも及び、日本では実習や講義の中断、オンライン化が余儀なくされた。一方、医学生たちが将来担うであろう役割である医療従事者たちは、医療現場の最前線で COVID-19 に対処し続けた。この状況を受けた医学生の反応は様々であった。COVID-19 の状況は医学生に対し多大な精神的プレッシャーを与えた。その中でも、黙々と勉学に励む医学生、必死に最新の情報を得ようと試みる医学生、社会に情報発信を試みる医学生など、1 人 1 人の行動は千差万別であった。1 つ共通しているのは、誰しもの生活が COVID-19 以前のものとは完全に変化してしまったということである。今回の企画では、COVID-19 の激動のタイミングでの医学生の行動に焦点を当てながら振り返り、今後の社会に対し前向きな行動変容を促すことを最終的な目的とした。

その結果、九州、近畿、首都圏に在する日本の医学部から 3 名、イギリス、フィリピンの医学生 2 名の合計 5 名の医学生をシンポジストとしてお招きし、現場の医学生の生の声をお届けいただいた。COVID-19 で学校生活、私生活がどのように変化し、その中で所属大学がどのように実習や講義などの実習を実施するために COVID-19 に対応したか、そしてその中で自分がどのようにアクションを起こしたのかについて発表していただき、参加者には医学生が COVID-19 に対しどのように立ち向かったのか、日本、そして世界の医学生のユニークな取り組みを紹介するよう取り組んだ。

また、シンポジウムの後半では、登壇していただいた医学生をパネリストとして、今後控える未来への医学生としての考察を行った。日本と海外の医学生が置かれた状況の相違点に焦点を置き、それぞれのメリットやデメリットを議論したのち、どのようなことを意識しながら医学生は今後、臨床実習や講義に参加すべきかという将来像についてディスカッションを行った。このパネルディスカッションは英語で実施し、日本国際保健医療学会の理事長である神馬征峰先生、本大会の大会長である中村安秀先生らからも質問をいただき、活発な議論が交わされた。

成果、今後の抱負

本会では、準備委員として企画段階からかかわることができたため、今までの学会と比較し、非常に長い期間をかけてかかわる貴重な経験であった。直属の教員が学会運営に奔走するのを目の当たりにしながら、自分が何もできない無力感を感じつつ、微力ながらお手伝いできる部分ではお手伝いをさせていただいた。

本来、私が準備委員と呼ばれていたのは、「グローバルヘルス合同大会 2020 大阪の学生代表として、学生企画をまとめ上げる」ことを目的としていた。当時は5つほどの学生企画を立案し、運営を行う予定であり、実際に私もシンポジウムの企画を行っていた。しかし、COVID-19により学会がオンラインへと変更され、学生企画も1つの枠に収められ、私の役割も学生共同シンポジウムの企画運営に加え、オンラインでの学会イベントの運営、設営へと徐々に増加した。当時は当惑した部分も大きかったが、結果として準備に深くかかわることができ、学会運営とはなんたるや、そしてその裏にある準備を知り、実際にかかわることができたのは非常に貴重な経験であった。今後私が学会を運営する機会があるかはわからないが、オンラインでのイベントの運営にかかわることはそれなりに機会があるもののと推察されるので、この経験を様々な場面で生かすことができればと考えている。

今回発表したポスター演題については、はじめて日本 WHO 協会とコラボレーションして発表することができた。今までは留学先であったハンガリーの研究チームと連携して発表を行ったことはあったものの、アカデミア以外のカウンターパートとともに研究を実施し、発表までつなげることができた経験はとても有意義だった。グローバルヘルスという分野では、1人の研究者、1つの研究機関で研究こそ進めることができるものの、実際に社会にインパクトを与えるような取り組みはどうしても難しいところがある。そのため、このように様々なアクターと連携しながらプロジェクトを進行させる経験自体も非常に有用であった。現在の研究を息長く続けるためにも、共同プロジェクトを各所と連携して今後も進めていきたい。

シンポジウムに関しては、医学生の実状をしっかりととらえ、それをまとめた形で発表できたことは有意義であったと思われる。COVID-19の影響を受け、各医学部がどのように対応するかについては、文部科学省からの一定の指針が示されたものの、実際の対応は各大学にゆだねられた。その結果、医学部間でも臨床実習の実施方法にはかなりの差が生じ、全国一律に管理されていた医学教育が均一になっていない可能性が指摘できる。その状況をしっかりと示しながら公式な場で問題提起を行えたことは社会的に有意義であったと感じている。この課題については、共同座長を務めた山崎氏とともに今後も追究していきたいと考えている。

さらに、全国、そして全世界から優秀な医学生を招待し、ネットワークを形成できたこ

とは非常に有意義であったと感じる。通常、ネットワークは作っただけで満足してしまいがちだが、今回形成されたネットワークは全員が各々の現場で活発に活動している。そのような医学生らが今回のシンポジウムを通じて同じ方向を向き、COVID-19 の未来像を考え、その中で必要なことを考え、社会に発表したことは特筆すべき成果であると考え。本シンポジウムの成果については国際保健医療学会の学会誌などに投稿する予定である。

謝辞

この経験がここまでも有意義になったのは、日々ご指導いただいている先生方のおかげであると実感しております。特に MD 研究者育成プログラムでご指導いただいている大阪大学大学院医学系研究科国際未来医療学講座/大阪大学医学部附属病院国際医療センターの中田研教授、山崎慶太特任准教授、田畑知沙特任准教授、中谷大作特任准教授とスタッフの皆様感謝申し上げます。そして、今回のプレゼンテーションを共に作成した甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究生の柳沢沙也子氏、そして温かくご指導いただいた大阪大学大学院人間科学研究科ユネスコチェア運営室の小笠原理恵氏、日本 WHO 協会理事長の中村安秀氏にも感謝申し上げます。

今回の学会は、企画の初期段階から準備にかかわることができ、大変感銘を受けました。大会長を4名で務められた大阪大学名誉教授の中村安秀先生、大阪市立大学の金子明教授、りんくう総合医療センター国際診療科長の南谷かおり先生、そして大阪大学の中田研教授のリーダーシップに大変刺激を受けました。さらに、COVID-19 という難しい状況の中で臨機応変な対応や業務を行っていた準備委員会の先生方に最大限の尊敬の念とともに、この場で謝辞を述べさせていただきます。そして、長きにわたる大会運営、大変お疲れさまでした。

さらに、本シンポジウムにご登壇いただいた京都大学医学部医学科の吉川健太郎氏、慶應義塾大学医学部の佐藤正幸氏、University College London の島戸麻彩子氏、University of the Philippines の Ian Kim Tabios 氏にも感謝申し上げます。吉川氏はご自身が起業されているフェムテック企業の進展についてご教示いただき、私のみならず登壇者へも大きな刺激を与えてくださったのではないかと思います。佐藤氏は慶應義塾大学の医学生有志として、臨床実習に対する医療系学生のガイドラインをエビデンスに基づき作成された経験についてお話しいただき、日本の医学生の優秀さを改めて痛感いたしました。島戸氏は発表当日よりロンドンでのロックダウンが始まった最中でしたが、イギリスでの医学生が「医療資源」として活動していたことをご報告くださり、フロアに大きく印象に残るプレゼンテーションを行ってくださいました。また、Tabios 氏も、当日フィリピンに大型台風

が襲来し、極めて接続が困難な状況の中でも、分子細胞生物学の専門背景をもつ医学生として PCR 検査へのボランティアに参加した経験をご報告いただき、海外の医学生の状況をとても臨場感あふれるプレゼンテーションとして実施してくださりました。ご登壇いただき、感謝申し上げます。

本シンポジウムに関して、さらに謝辞を述べさせていただきます。共同企画者として本企画を支えてくださった熊本大学医学部医学科の城戸初音氏、獨協医科大学医学部医学科の鈴木健生氏は、準備から広報まではもちろんのこと、当日はシンポジウムの裏側で様々な細やかな調整を行ってくださりました。非常に優秀な方々でしたので、パネリストとしてはご登壇いただいていたはずでしたが、どうしても裏方に秘めておくだけではもったいないという気持ちが強くなり、無理をお願いして少し発言していただきました。このお二人なしには成り立たなかったシンポジウムであることをこの場にて改めて強調し、謝辞を述べたいと思います。

そして、共同企画者、共同座長としてともにシンポジウムを作成し、さらにはシンポジストとしてご登壇いただいた長崎大学医学部医学科の山崎里紗氏にも謝辞を述べたく存じます。企画段階から当日の運営まで、呼吸を合わせて二人三脚で最後まで走りきることができたのは、ともに実施したパートナーが山崎氏であったからだと感じています。厚生労働省でのボランティアから SARS-Cov-2 の研究など幅広く活動するバイタリティに感服するとともに、改めて尊敬の意を表します。

共同企画者、共同座長、演者、そしてフロアに恵まれたシンポジウムであったと思っています。本当にありがとうございました。

末筆となりましたが、このような機会を恵んでくださりました岸本忠三大阪大学名誉教授に最大限の感謝を述べさせていただきます。誠にありがとうございました。並びに本誌助成金採択に関わってくださりました皆様に感謝申し上げます。

MD 研究者育成プログラム参加者向けの岸本国際交流奨学金

S・S

大阪大学医学部医学科 5 年次

この度、[第 31 回日本疫学会学術総会](#)に本助成金を利用し参加したため、ご報告申し上げます。

日本疫学会は疫学を担う、あるいは活用する人材として、予防、臨床、看護、介護の分野のみならず、広く心理学、社会科学、政策学等の文化系の学問や実践の分野の人々の参加が重要であり、その交流の場として機能している。その最たる場が今回開催される学会学術集会である。すなわち、疫学の分野に精通する、あるいは志す日本の研究者が集う場であるといえる。今回は、オンラインにて開催された。

今回の学会では、一般演題のみならず毎日シンポジウムが開催されるとともに、水曜日には疫学セミナーが開催された。現在話題となっている新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のみならず、運動疫学研究、非感染性疾患(NCDs)、国際連携など私が携わる研究分野が取り上げられた。

活動内容

1 日目は疫学セミナーに参加した。本セミナーでは、オミックス解析をはじめとした各種バイオデータを活用した疫学研究に関する視座を提供するものとなっていた。そのため、疫学という分野にとらわれず、ゲノム解析やデータベース構築など様々な分野に話が及んでいた。疫学という分野ではデータ解析のみならずデータを取得することにもかなりの労力が必要となるが、その潮流が変わりつつあることが実感できた。本セミナーでは聴講する際、関連する文献や書籍などが適宜紹介され、それらを参考にすることで内容をさらに活用できるよう工夫されていた。

2 日目以降は主に基調講演やシンポジウムに参加した。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染症疫学からそこに関連した生活習慣病の動態変化に着目したシンポジウム、COVID-19 の中での運動疫学の潮流など幅広い分野での最先端の研究についての講演を拝聴することができた。現在行っている研究に関わるような講演も多数あり、日本や世界でその最前線で活躍されている先生方に直接質問ができる機会が得られた。

成果・感想

世界の最先端でご活躍されている先生方に、現在自分が研究で疑問に思っている点を質問できたことはとても有意義な経験であった。学術的な知見のみならず、実践的なアドバイスをいただけたことは、現在のプロジェクトに閉塞感を感じていた部分に対するヒントとなったように思われる。

なお、今回はオンライン学会であったため、報告書作成締め切り後より開始されるオンデマンド配信を再度視聴する予定である。これについては現在行っている研究に関連する基調講演や、いくつかの口頭演題を拝聴する予定である。先述の通り、今回は基調講演やシンポジウムなど、比較的大きな会合を主に選んで参加した。これは、そこで講演されている先生方に対してリアルタイムで質問する機会はそこしかないと考えたためである。日本疫学会は Zoom のウェビナー機能を用いて開催されており、Q&A の機能で質問を送る形式となっていた。Zoom での質問は慣れ不慣れがあるかもしれないが、他の先生方に気負いすることなく聞きたいことを聞くことができ、学生にとってはとてもありがたい機能であると考えている。ほかの先生たちの質問と並列に自分の質問が並び、いい質問をしっかりとすれば座長の先生が拾ってくれるからである。

前回参加したグローバルヘルス合同大会 2020 ではシンポジウムの合間に口頭演題が入っており、口頭演題に対してもリアルタイムで参加することができたが、今回の日本疫学会学術総会ではすべてのプログラムの裏で口頭演題がオンデマンド配信とされていたため、物理的に同時に口頭演題と基調講演を視聴することが難しい状況にあった。日本疫学会学術総会では視聴者の動向がどのようなであったのかはわからないが、最適なオンライン学会の制度についてはまだ様々な方針での試行錯誤が可能となる印象を受けた。

また、今回の学会については、Zoom のウェビナー機能の仕様上、視聴者からのコメントやインターアクションが少なくなってしまったのが残念であった。学会とは互いにインスピレーションを与える場として本来は機能してほしいものの、その機会が限られてしまうというデメリットは、地理的条件から参加できる範囲が広がることよりも大きいような気がしてならない。オンラインで手軽に学会に参加できるようになった時代が到来したとはいえ、オフラインでのディスカッションなどの大切さが引き続き強調され、ポストコロナ時代には参加が可能となるような制度が維持されることを期待したい。

また、末筆になりましたが、貴重な経験や視座を提供してくださったこのような機会を提供してくださった岸本忠三先生ならびに本奨学金採択に関わってくださった皆様に感謝申し上げます。